

# 総合リサイクル事業を拡充

## 三功 廃棄物発電の検討も

三功(津市、片野宣之社長、☎059・255・5597)は、昨年段ボールの回収を開始し、廃棄物・資源物の一括受け入れを可能にした。生ごみやプラスチック類、缶・びんなどについてはリサイクルシステムの実績を確立しており、さらに総合リサイクル事業の拡充を図る。また、再生エネルギー固定価格買取制度(FIT)の施行を受け、発電事業の検討も進めていく方針だ。

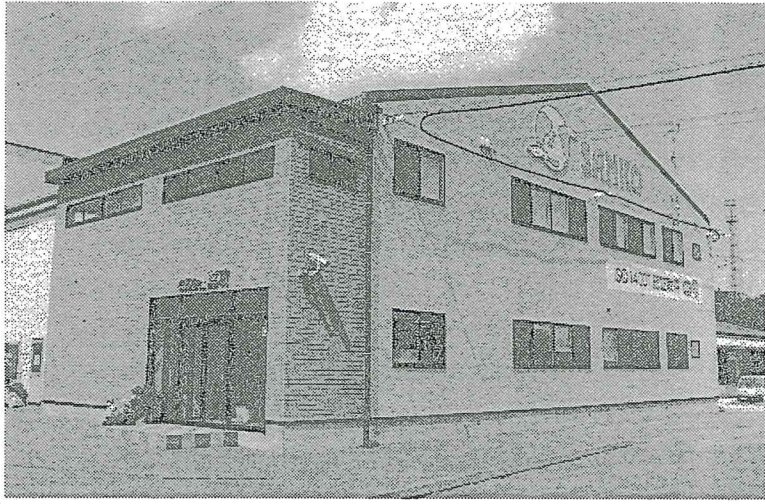
同社は1970年、一廃収集運搬業の許可を津市と久居市(現・津市)から取得して開業。現在、一廃は三重県内の8市6町に許可

区域を広げ、スーパーマーケットやホームセンターなど大手流通関係をメインの顧客としている。産廃については三重、愛知、奈良、岐阜の4県が営業範囲となっている。

食品リサイクルの分野へは95年に進出した。その他の資源物については、97年に発泡スチロール溶融施設を導入。06年には第2リサイクルセンターを開設計して、空きびん、空き缶、PETボトル粉砕設備、発泡スチロール溶融設備を整え、マテリアルリサイクルを可能とした。RPF製造施設も備え、サーマルリサイクルも実施している。

既存顧客のスーパーマーケットなどから出る段ボールを1日当たり15~20ト回収している。総合的なリサイクルの手法がそろったことで、「スーパーからの排出物をすべて自社で受け入れられる体制が整った」(片野社長)という。

今後は、マテリアルリサイクルで利用が難しい生ごみや廃プラについても有効利用を目指し、発電事業の検討を行う。「今年は次のステップへの準備期間。顧客の要望にこたえられる体制を充実させていきたい」としている。



社屋外観

廃プラリサイクル事業では、97年から選別物の有価販売を開始。07年には自社施設で廃プラを破砕・洗浄・脱水・圧縮梱包して出荷、提携先の中国工場でごみ袋に再生して日本に